

おぼけのきせつ／つか

陽羅 義光

どうもこの歳になると、記憶（きおく）のなかから、とんでしまう、おぼけがあります。

おぼけにはすまないことなのですが、どうしようもなく、もしかすると、それらのおぼけは、かくべつにおぞましいので、忘れよう忘れようという意識が、とぼしてしまうのかもしれない。

それで、すこしずつではありますが、いくらおぞましくとも、憶いだすたびに、紹介していければと、かんがえました。

本編は、あいうえお順にしましたが、追加分は憶いだした順となります。

五月夜や尾を出しさうな石どうろ 泉鏡花

+ 1 【はかばへび】

中山の裾（すそ）ちかくの斜面（しゃめん）に、村の墓場（はかば）があります。

ぼくはお使いなどで、そのそばをとおるときは、できるだけ目をそむけることにしています。

なぜなら、墓場にいる蛇（へび）は、【はかばへび】というおぼけだと、懐爺にきかされていたからです。

でもある日の夕方、完ちゃんといっしょだったので安心して、墓場を見てしまいました。

【はかばへび】がいました。

うじゃうじゃいました。

大きいの小さいの長いの短いの白いの黒いの。

墓石に数かぎりなく蛇がからみついでいて、完ちゃんといっしょに驚嘆（きょうたん）の声をあげました。

「だれのはかかのう」

ぼくがつぶやくと、

「蛇の墓だよ」

と完ちゃんはいいます。

「へびにもはかがあるんかのう」

「あいつらは蛇のご先祖（せんぞ）を守っとるんだ」

「えらいのう」

「えらいけど、きみわるいなあ」

そして完ちゃんは、落ちていた石を拾うと、墓石にむけて（いや、蛇たちに、むけて）投げ付けました。

それが小蛇にぶつかったのです。

それからが大騒ぎでした。

ぼくたちではなく、蛇たちが。

たまたま石が当たった小蛇を、中蛇が呑み込み、その中蛇を、大蛇が呑み込み、その大蛇を、超蛇（ちょうじゃ）が呑み込み。

またそれを他の蛇たちもやったものですから、見る見るうちに、墓石には超蛇が七匹ほどだけ残りました。

そこに完ちゃんがまた石を投げると、こんどは超蛇が超蛇を呑み込みはじめ、最後には一匹の超超蛇（こういう言い方をしたのは、こういう言い方しかできないほど大きくて気味の悪い蛇だったから）だけが残りました。

この超超蛇の腹のなかには数かぎりない蛇がいるわけですが、その蛇たちがどうなっているのか、ぼくは気になってしかたがありません。

「はらのなかで、とけちまったんじやろうな」

「それはすぐわかるさ」

と完ちゃんはいうと、その超超蛇にまた石を投げ付けました。

超超蛇は鎌首を烈しくもたげると、ぼくたちにむかって真っ赤な口を突き出しました。

「うがうが」

「だはだは」

ぼくたちは言葉にならないさけびごえを発し、逃げるのですが、超超蛇の口から飛び出した無数の蛇たちが追い掛けてくるのです。

逃げてても逃げてても追い掛けてくる。

その動き、その色、その気味悪さは一度も見たことがないもので、こ

れは夢だと念じたものです。

完ちゃんが転ぶと、半ズボンからとびでた裸の足に蛇がからまりついてくる。

ぼくは長ズボンだから、蛇がからまりついたら脱げばいいとおもっていました。

「かんちゃんがんばれ、ほらほら、もうすぐかいじいのほこらじゃ」

ようやく祠に着き、蛇たちはいつのまにか消えましたが、完ちゃんの足は蛇に噛まれて血だらけです。

「【はかばへび】のたたりですな。悪い血を抜かないと治りませんよ」

「なおらんと、どうなるんじゃ」

ぼくがききました。

「足の傷口から蛇が何匹もでてきて、いつまでもでてきて、止まらないんですよ」

懐爺は蛇顔になっていました。

「そいつはえげつないことじゃのう」

「そうしてやっと止まったそのときには、蛇男になっているんです」

「へびおとこたあなんじゃ」

「ちょっといえないくらい無気味なものです」

「なんとかせいや」

ぼくはせかします。

懐爺は青息吐息（あおいきといき）の完ちゃんの足に汚い口をつける
と、血を吸い出しては唾を吐き、吸い出しては吐き、数十回もやりました。

ちゅちゅ

ぺえっ

ちゅうちゅ

ぺえり

ちゅりちゅ

ぺぺぺ

ちゅっつ

ぺりぺっつ

ちゅ

ぺっ

完ちゃんの顔色がだんだん良くなってきました。